

第41回

# 日本生活学会 大会 講演会

5/10 (sat)

13:00-15:00

@ 青山学院大学 (青山)

## 講演会 「都市の日常性」

倉石忠彦 伝承としての都市—「渋谷」把握の方法—  
三浦 展 私は街をどう見ているのか。

日時 2014年5月10日 13:00-15:00

場所 青山学院アスタジオホール

主催 日本生活学会・青山学院大学総合文化政策学部共催

司会 日本生活学会副会長 和崎春日

13:00-13:10 日本生活学会会長 小林多寿子 挨拶

13:10-13:20 大会運営委員長 黒石いずみ 講演会趣旨説明

13:20-13:50 倉石忠彦先生

講演 伝承としての都市—「渋谷」把握の方法—

13:55-14:25 三浦展先生

講演 私は街をどう見ているのか。

14:30-15:00 質疑応答・ディスカッション

### 講演者プロフィール・演題要旨

倉石 忠彦 (Kuraishi Tadahiko) 先生

國學院大学名誉教授

主要著書：『子供の遊びと生活誌』『都市民俗論序説』『民俗都市の人びと』『現代都市伝承論—民俗の再発見—』（共編著）『都市民俗基本論文集』全5巻（共編著）『渋谷をくらす—渋谷民俗誌のこころみ—』（編著）『身体伝承論—手指と性器の民俗—』『道祖神と性器形態神』

演題 伝承としての都市—「渋谷」把握の方法—

現代「東京」の代表的な場の一つが「渋谷」である。だが「渋谷」とは一体どこなのであろう。それは「東京」の場合も同様であって、行政区域ではもちろんない。そうしたイメージとしての「渋谷」をフィールドとして、「渋谷」を捉えようとする作業は、一面「渋谷」を探す営みであり、「都市」を見いだす営みでもあった。民俗学は、伝承と呼ぶ文化事象の連続的側面に注目する。常に新しい文化事象を生み出す都市の生活の中から、連続する文化を見いだそうとする作業は、「都市」の伝承文化を発見しようとする営みである。そうした伝承文化発見の困難さと、それによって見出すことができた、「渋谷」の時間と空間、人々の行動形態の一端を紹介する。

三浦 展 (Miura Atsushi) 先生

社会デザイン研究者 「カルチャースタディーズ研究所」所長 消費社会、家族、若者、階層、都市などの研究を踏まえ、新しい時代を予測し、社会デザインを提案している。

主要著書：80万部のベストセラー『下流社会』のほか、『第四の消費—つながりを生み出す社会』『東京は郊外から消えていく！』『「家族」と「幸福」の戦後史』『ファスト風土化する日本』『東京高級住宅地探訪』『高円寺新東京女子街』『吉祥寺スタイル』『スカイツリー—東京下町散歩』『大人のための東京散歩案内』『奇跡の団地—阿佐ヶ谷住宅』などがある。

演題 私は街をどう見ているのか。

あなたは街をどう見ているのかとよく聞かれる。私はずっと街の個性とは何だろうかと思っていて、結局個性は街を構成する要素の無数の組み合わせから生まれるという、当たり前の結論に至った。街の構成要素とは、道路、ビル、住宅、店舗などから、街灯、看板、落書き、ポスター、郵便受け、門柱、窓、街路樹、庭などであり、各構成要素がその広さ、大きさ、素材、色、デザインなどによって多様に存在しうる。こうした構成要素から街を見た本が『高円寺—東京新女子街』である。高円寺は構成要素が多く、かつ各要素の多様性が豊富であり、個性的である。その多様性を楽しむと、いくらでも街を歩いて時間を過ごせる。逆にニュータウンは構成要素が少なく、各要素の多様性も少ない。

